

第3回北海道開発協会助成活動発表会・懇談会

各地で展開する地域活性化活動をサポート

（財）北海道開発協会では、非営利の市民団体が行う地域活性化活動に対して平成14年度から助成を行っており、これまで9年間で65件になります。これらの活動をより効果的にサポートするために、平成20年度から、助成を受けた団体の方々に活動成果等を発表していただき、参加者が地域づくりなどについて自由な意見交換をしていただくための「助成活動発表会・懇談会」を開催しています。第3回目を迎えた今年度は、平成21年度に助成を受けた団体を対象として6月19日に札幌市内において開催されました。

祝津の文化と遺構を継承し地域の活性化へ

活動名：地域資源を活用した漁村コミュニティの構築プロジェクト

祝津の発展は、昭和33年の北海道博覧会に始まるといわれており、博覧会の海の会場として小樽水族館が建てられ、祝津マリーナや小樽市鯨御殿もこの時期に建てられています。ここは、札幌圏からも近く、近年では年間35万人が小樽水族館に来館する地域で、周辺には鯨場時代の遺構も多く残されていますが、これまで注目されることはありませんでした。このため、この鯨場の遺構を核とする地域の活性化を目的として、「祝津たなげ会」を平成20年4月に立ち上げました。会は地域の学校や住民・漁民と連携し、毎年多数の事業を開催し少しずつ住民理解も深まってきました。

会では、4つの基本プランを中心に活動しています。一つ目は、「祝津の宝物を発見」。地域の自信と誇りを



渡部 満 氏
おたる祝津活性化委員会
「祝津たなげ会」

育てる活動。二つ目は、「祝津の宝物保存」。倒壊の危機にある鯨番屋群の記録と延命化。三つ目は、「祝津の宝物みえる化」。地域資源活用を目指したコンテンツ化。四つ目は、「資料の取りまとめ、報告書作成と報告会」を設定し、次世代へ宝物をつなぐ役割を担っています。

活動は、基本プランに沿った郷土の遺構・景観・海洋などの調査の一環として、祝津在住の墨彩画家作『祝津物語』の資料収集とデジタルコンテンツ化の作業や地域に残る家印、祝津の古い写真などの収集を行っています。

また、倒壊の危機にある茨城家中出張番屋^{いばらき かちゅう しゅつちやう}は、国の地域活性化雇用促進事業により修復され、町内会との連携や5月に開催した「おたる祝津にしん祭り」において番屋群の現状を知っていただくため、北海道職業能力大学の駒木定正先生を中心に「鯨番屋巡りツアー」を実施しました。

さらに、「祝津たなげ会」ホームページを昨年11月より運用を開始し、最新情報・祝津の歴史・鯨文化・見所・施設紹介・グルメ・特産品、会の紹介もしています。また、地域住民の方々に活動内容を広く知っていただくために、祝津物語や建築調査およびホームページ等の内容に関する報告会を実施しました。

祝津に関わるさまざまな取り組みは、漁村コミュニティの構築として、漁師を含めた祝津地域の住民と祝津に残る地域資源を活用し、また、幾つかのプロジェクトとの連携や地域の事業に関わりながら、修復した番屋を中心に地域の文化と遺構を継承し、地域の活性化を成し遂げる、非常に大きな役割が期待されています。

食育や都市と漁村のネットワークで人材教育を

活動名：食育を通じた「将来のかしこい消費者」育成事業



古屋 温美 氏
NPO法人水産物トレーサ
ビリティ研究会

活動の場所は、函館市南茅部地域で、コンブとイカを題材にした「食育授業」と「都市漁村交流」の2つの事業を実施しました。

食育授業では、8月に函館市内の北星小学校の子供たちとPTAを対象に4年前から函館市と関係機関の連携により取り組み始めた函館イカマイスター認定制度の活用と併せ、地元で活動する「みなとまちづくり女性ネットワーク函館」との共同主催で、コンブとイカのキッズマイスター出前講座を行いました。

今回の出前講座では、愛媛大学の若林良和先生が提唱する「ぎょしょく教育」に関して掲げる6つのプロセス、①魚触：魚に触れる、②魚色：魚の生態を学ぶ、③魚職：漁業について学ぶ、④魚殖：養殖業について学ぶ、⑤魚飾：漁業の文化や伝統料理について学ぶ、⑥魚食：魚を食べるに沿って、乾燥前の昆布や活イカの釣り体験。「魚の生態を学ぶ」では、北大水産学部の学生2人によるイカの生態の話やイカの流通技術で、イカの神経をメスで傷つけ瞬時に色が白く変わる瞬殺の様子を見てもらいました。

「漁業について学ぶ」では、漁師の青年部の方に養殖コンブ作業の話をしていただき、漁業の文化や伝統料理、そして「魚を食べる」として、PTAのお母さん方の協力で、子供たちがイカめし作りを体験し、一緒に試食しました。

次に都市漁村交流では、消費者や漁業関係者を対象にコンブワークショップを10月に開催し、出前講座の追加報告と地元栄養士による昆布の栄養や料理方法のお話、さらに昆布料理の試食会を行っています。

このような食育活動と都市漁村交流の場として、函館は近隣漁村との合併によりさらに生産者と消費者が近い地域となり、食育活動や交流を行うには非常に優位性がある地域です。

将来のかしこい消費者育成のための産地の取り組みや資源状況と消費の仕方を学び、かしこい消費者になってもらいたいというのが活動の最終的な目的です。

市民の力で支える地域医療

活動名：市民によるメディカルスタッフ確保事業



森 義和 氏
留萌がんばるかい

留萌二次医療圏は、東京と大阪を合計した面積と同じです。この広大なゾーンで留萌市立病院はたった一つの中核病院として機能しています。そのため、一般の方でもよくご存知の「不採算部門」である365日24時間の救急救命外来や出産なども、同院が一手に引き受けています。これらの責務に堪えるべく平成13年に新設された同院には、救急車やヘリポートから素早く救命外来室に入れる構造になっています。高度検査機器群もストレッチャーでの移動時間を少なくし、素早く検査が行えるよう配置されており、MRI、64列マルチスライスCTと必要にして十分な機器を備えています。

こうした先端医療機器には各専門教育を受け、国家資格を有している専従のスタッフが必要で、特に同院では24時間即応体制をとる必要があります。しかし、わが国ではあらゆる分野での担い手が不足するという急激な少子化が起こっています。また、同時に高齢化が進行しているため、受診機会が急激に増加しています。そのため、地域の重要施設である同院でさえ、スタッフ不足という危機的状況に直面しています。

こうした先端医療機器には各専門教育を受け、国家資格を有している専従のスタッフが必要で、特に同院では24時間即応体制をとる必要があります。しかし、わが国ではあらゆる分野での担い手が不足するという急激な少子化が起こっています。また、同時に高齢化が進行しているため、受診機会が急激に増加しています。そのため、地域の重要施設である同院でさえ、スタッフ不足という危機的状況に直面しています。

当会では、同院の医師や機材を取材し、広報紙の作成・配布（累計12万部）を行い、当圏域の全世帯に配布するなどして啓蒙活動を行ってきました。ただ、当圏域には看護学校はもちろん、高校より上位の学校が一つもありません。そのため、こうしたスタッフ不足を解決するため、当圏域から飛び出して学生に直接PRすることを企画しました。

まずは、多忙な同院の医療人ではなく、地域住民が主体となれるように考えたところ、肉・魚・野菜とい

う食の宝庫という地域の特徴をPRするのが良いという結論に達しました。そこで本事業では、札幌においてすべて留萌産の食材を使用した野外ジンギスカンパーティーをすることにしました。この場に学生を招き入れ、地域医療の生の声を聞いていただくというもので、全7回を実施することができました。

本事業後も、同院を守るために精力的な市民活動が展開されています。例えば、海外を含めたさまざまな大学・学校から学生を招聘する見学ツアーの実施や、既存のリンゴ園を障害やストレス解消に無料で活用できるようにした増毛町にある「リハビリ・リンゴ園」です。

こうした市民活動は、増毛町出身でありながら大都市部で活躍されている順天堂大学医学部の富野康日己学部長やフランス料理の三國清三シェフの協力を得ながら進められ、大きな街と小さな街との共存共栄が図られています。

地域防災ファシリテーターを活用した地域防災活動

活動名：福祉NPOと連携したオホーツク市民防災活動推進事業



谷井 貞夫 氏
NPO法人北見NPOサポートセンター

今回の活動は、防災時における要援護者の支援体制構築、地域防災活動リーダーの育成、地域防災活動への理解・啓発を目的に実施しました。

この事業の背景には、平成19年から3カ年にわたり網走開発建設部の地域防災ファシリテーター育成事業により、北見市、網走市、紋別市等で育成した人々を活用するということがありました。私どものNPO法人は、地域のNPOや市民活動を支援していますが、その多くは福祉のNPOです。高齢者や障害者の地域生活の場として、いろいろな施設ができましたが、先ごろ発生した札幌市北区のグループホーム火災では施設自体の認知度も低く大きな被害をもたらしました。このような施設の運営には地域との連携が必要ということです。

活動は、訓子府町、北見市、佐呂間町にあるNPO

法人と地域住民や町内会と連携しながら実施しています。今回行った災害図上訓練は、災害時の行動をゲーム感覚で理解するもので、被災時のイメージ訓練として、地震が起きた直後や数時間経過後、および避難勧告や避難指令が出た際の行動などを、ワークショップ形式で各グループごとに話し合い発表します。

その他、防災マップづくりとして、地域の防災情報となる要援護者所在地や危険箇所、一人暮らしの高齢者がどこにいるのか、言葉の通じない外国人も要援護者として扱い、それらの情報を住宅地図に書き込みます。この仕組みが有効に働いた事例として、北見市の断水事故の際、この地図に基づき一人暮らしや高齢者への支援が迅速に行われたという実績があります。

これらの実施資料は、佐呂間町の国道沿いのコミュニティ施設「街の駅わかさ」に、一般の方にも目に触れるよう展示しました。

今後も地域のNPOと地域に住んでいる高齢者や障害者の方とも連携して活動を続けていきたいと思っています。

湖内に沈む北海道遺産とトロッコがつなぐ地域連関

活動名：鉄道トロッコでまちづくり

当会は、旧士幌線のアーチ橋と線路跡を使い、まちづくりを行う会員数200名のNPOです。

士幌線に架かるアーチ橋は、タウシュベツ川橋梁をはじめたくさんありますが、タウシュベツ川橋梁は、その年の気候によって、早く湖内に沈むことがありますので、観光資源として安定性がありません。そこでアーチ橋観光のもう一つの柱をつくるべきとの考えから、6年前から鉄道再現事業として旧糠平駅の構内で鉄道の再現を行ってきました。

今年度は、平成21年度までに敷設した420mの線路を200m伸ばしました。線路の敷設は専門者の技術者の指導がないと上手にいかないため、元国鉄保線区長さんの技術指導のもと、地元の建設業者の協力で線路を敷設しました。鉄道トロッコの試乗会は、7、8月



角田 久和 氏
NPO法人ひがし大雪アーチ橋友の会

の主に土日に行い、約20日間で1,500人以上、一日平均70人程度の方に利用いただき、東京・大坂からもたくさん来られました。

十勝の鉄道トロッコは、ほかにも陸別町、新得町、上士幌町の3町で行っています。地域づくりを考える場合に市町村単位でやる時代ではないと、昨年のシンポジウムの際に辻井達一先生から助言をいただき、まずできることからということで、平成22年度から陸別、新得、上士幌の3団体が共同のリーフレットを作り各々の町に置いています。特に十勝の場合は、6月28日から高速道路が無料になり、来年には札幌圏から高速道路一本でつながるといことがありますので、十勝圏全体で考えた地域としてお互いにメリットのある連携を行っていききたいと思います。

上士幌町はナイタイ高原牧場、十勝の美しい農村景観、アーチ橋、熱気球で観光振興を図っていますが、今年は口蹄疫の影響で、8月の熱気球大会は中止となり、観光関係者にとってはつらい年になっていますが、その中で今後も鉄道トロッコを使って上手に観光振興を図っていきたく考えています。

可能性を広げるバリアフリーバスケット

活動名：すべての人々に感動！空の旅プロジェクト



青柳佳津美 氏
士幌スカイエンジェルパ
ルーンクラブ

士幌スカイエンジェルパルーンクラブは、パイロット養成と各大会の出場が主な活動ですが、1999年11月11日に発足し、係留飛行を通じて同じ感動を味わってほしいという思いから、会を設立しました。

各町のイベントや保育所において、ロープを3点で張って地上から2~30m上げる係留飛行を開催してきましたが、平成20年8月の「しほろ7,000人まつり」の熱気球体験搭乗で、成人女性が気球から降りる際にゴンドラの縁で足をつまみずき転倒し負傷する事故が起きました。そのため安全対策が検討され、今回のバリアフリーバスケットが検討されました。

士幌町の姉妹都市である岐阜県美農市の小学校6年生との交流事業として、スタッフ手作りの昇降台でバ

スケットへの乗り降りを8月23日に実施し、町役場駐車場に200名が集まりました。地域イベントでの熱気球体験搭乗会として「しほろ7,000人まつり」では、21年8月16日士幌小学校のグラウンドで約300名が体験搭乗しました。

今回購入しましたバリアフリーバスケットは、旧型とは違い横からドアが開き、大変乗降が安全にできます。バスケットはすべて外国製で、価格も高く、今回の助成によって購入できました。平成22年2月17日に初めて新しいバスケットを使っての体験搭乗を認定子ども園児への卒園プレゼントとして行い、子供たちは安全に扉を開いて低いところから乗り降りできました。また、これまでお年寄りやスタッフ手製の籠を踏み台にして3人がかりで乗り降りするような格好で実施していましたが、このバスケット購入後はスムーズに乗り降りができ、障害者の方も車椅子のまま乗るなど体験搭乗者の幅も広がり、スタッフ全員喜んでいきます。バリアフリーバスケットのメリットは、体験搭乗者やお年寄りの安全搭乗、時間の短縮とそれに伴う燃料の軽減、乗り降りに携わるスタッフの疲労軽減、車椅子で搭乗ができるようになったことです。

本年もさまざまなイベントや交流事業の中で多くの子供たちやお年寄りの方々に空の上は気持ちがいいと感動いただけるよう、今後もスタッフ一丸となり努力し続けてまいります。

明治期に道内を旅する英国女性旅行家の軌跡を活用

活動名：イザベラ・バード・地域再発見プロジェクト～歴史から未来につなぐ一歩づくり・川づくり・まちづくり～

当会は、1878（明治11）年に来道した英国女性旅行家のイザベラ・バード（以下、バード）が歩いたとされるルート周辺の自然環境や歴史・文化などの地域資源の発掘を行うと同時に、単なる歴史の発掘に止まらず、ルートに近い道や川に沿って「フットパス」を設定することに着目し、北海道の自然と文化を活かし



窪田留利子 氏
イザベラ・バードの道を辿る会

た新たな地域産業としてのエコツーリズムを具現化し地域づくりに活かしていくことを目指しています。

これまで日高町富川から平取町に至る沙流川流域や白老町市街地および森林の河川沿いのルートの踏査をはじめ、各地で地域住民・郷土史家を交えた意見交換会やバード研究家を招いての講演会を行ってきました。

函館と札幌を結ぶ札幌本道建設工事の一環として森から室蘭への渡航を目的に「森棧橋」が明治5年に建設され、その後、森・室蘭間に定期航路が運行されましたが、今回の活動の一つ目として、アイヌの人々が暮らす平取に向けて出発した記念の地であるこの森棧橋跡近くに案内板を設置しました。さらに、かつてバードが沙流川を渡河した地点に近い平取町の紫雲古津川向大橋につながる町道にも案内板を立てました。

活動の二つ目として、函館・森間はシーニックバイウェイ函館・大沼・噴火湾ルートの設定範囲に入っていることから、ドライブコースと立ち寄り地点のフットパスコースの組み合わせを考え、函館市元町地区、七飯町地区、森町地区においてフットパスコースを設定し、バードの紹介に加えて周辺の地域資源も紹介したフットパスマップを作成しました。また、沙流川地区は、日高町富川～平取町間での現地踏査をもとにフットパスコースを設定し、バードの案内板の紹介や沙流川流域の地勢・歴史等を記述したフットパスマップを作成しています。

フットパスコースとしては、かつてイザベラ・バードが歩いたと思われるルート「旧イザベラ・バードロード」とし、その一部が現在の国道にほぼ重なるため交通量を避ける意味からも、現在の沙流川流域に広がる水田や平取町特産のトマトハウスなどの田園風景を楽しみながらJA直売所を休憩ポイントとして織り込んだ「新イザベラ・バードロード」の2つを設定し、マップに掲載しました。今後は、地域の人材発掘とネットワーク化、地域の魅力再発見について啓発活動を行っていく予定です。

全国初の合同学生祭

活動名：第9回大門祭



青山 結 氏
大門祭実行委員会

大門祭は函館市内の大学・短大の学生が主体となった日本初の合同学生祭で、2001年より函館市大門地区で開催し、今回で9回目を迎えました。

大門祭開催のきっかけは、函館駅前大門地区商店街を活性化しようという街の人が学生に声をかけたことにあります。

また、函館市内の8つの高等教育機関でのキャンパスコンソーシアム以外の大学間交流が少なく、市内の学生が大門祭の実行委員会に参加することで、さらに大学間のつながりが築けると考えました。実行委員会の特徴は、学生と地域の人々とが協力によって祭りを作っている点で、幅広い年代との交流と意見交換を頻繁に行っています。また、交流会や地域イベントにも積極的に参加しています。

第9回大門祭は、7月18日、19日の2日間の日程で開催し、大門地区をたくさんの笑顔で埋め尽くそうと「SMILE」というテーマを立てました。函館開港150周年記念事業の連携事業としても行いました。商店街や街の人々から寄せられた函館の街や大門祭に対するたくさんの意見を参考に、街と学生とのコラボレーション企画も取り入れています。実行委員会では、地域の活動にも積極的に参加し、そこで生まれたつながりを大事にしています。

第9回大門祭では、開催二日目に女性1名が怪我をする事故がおき、消防署からの勧告に従い、残りのプログラムを中止しました。今後二度と同じような事故を繰り返さないよう安全マニュアルを作成し、安全な祭りの開催を目指していきます。今回の事故で、代表としての責任を感じている中、街の人から励ましや応援する声をいただき、お祭りを続けることが非常に大事だと感じました。地域活性化といっても、学生ができる範囲は限られていますが、大門地区の良さを再発信し、今後も大門祭を続け地域活性化のきっかけづくりを目指し活動していきたいと考えています。